

<巻頭言>

穏やかな人格とスピリチュアリティ

阿 部 包 (藤女子大学 QOL 研究所長)

これまで歩んできた人生の道のりで、これほどまでに穏やかな人格はどのようにして可能なのだろうと感心する機会が幾度かあった。思い起こしてみれば、それは、多くの場合、司祭や修道者との出会いであった。

一人目は、フランシスコ会聖書研究所のベルナルディン・シュナイダー神父である。1917年合衆国のお生まれで、来日は1952年。1956年に開設された同聖書研究所所長に就任し、その職を長く務められた。分冊で出版され続けた聖書全巻の翻訳と注解は2002年に、『エレミヤ書』で完結を見た。神父はこれまでの生涯の半分以上をこの極めて困難な作業に捧げられたことになる。聖アントニオ神学院で開かれた学会でのこと。神学院の食堂で戴いた夕食後、ちょっと腰の曲がったシュナイダー神父が笑顔で入って来て席に着くと、間もなく彼を中心に研究者や司祭たちの輪ができた。一時、談笑が続いてから、数人の人々に付き添われて神父は部屋に戻って行かれた。

二人目は、レデンプトール会のワルデマル・キッペス神父である。ドイツ人で1930年のお生まれ。1998年以降、臨床パストラルケア教育研修センターを主催し、全国各地で研修会を開催して来られた。今でこそ、わが国でも病院内でチャプレンが仕事をするようになってきたが、まだまだ患者とその家族の心のケアは十分とは言えないのが現状である。精神や心理面はもちろん宗教や霊的な側面にも十分配慮しながら、患者とその家族に寄り添い、真摯に耳を傾け、共に歩むための専門的訓練が必要なのである。羊たちの声を聴き分けかれらの世話をする羊飼いがパスター、その形容詞がパストラルである。キッペス神父も、もの静かで穏やかに話される、微笑を絶やさない人である。

三人目は、日本人でSr. 片岡千鶴子である。長崎純心聖母会のシスターで長崎純心大学学長を長く務めて来られた。隠れキリシタンの末裔として、御自身も浦上四番崩れをはじめキリシタン史の研究家である。上智大学で開かれた学会が終わって、方向が同じだったので四谷駅から市ヶ谷まで一駅分中央線をご一緒した。会場から駅へ向かう道中とホーム、そして車中のたかだか十分弱の会話に過ぎない。それでも、人柄は汲み取れるものである。やはり、楚々として穏やか、こちらにも見事なまでの心の風ぎは伝わって来る。

お三方に共通しているのは、推測すれば、厳しい自己鍛錬と他者に自らの心を開くことが心の習慣にまでなっていることであろうか。そこに、わたしはスピリチュアリティと言ってもよいものを感じる。時代を隔てた他者の声に徹底的に耳を傾け生涯対話を続けること(シュナイダー神父、Sr. 片岡)。極限状況にある患者とその家族の心の痛みを耳を傾け、それを共に担いながら歩む人の群れをつくること(キッペス神父)。いずれも、通常感覚では忍耐と犠牲を要する営みだが、お三方にとってはこよなく楽しいお恵みに思えてならない。